
黒白の輪舞曲

ASH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒白の輪舞曲

【Nコード】

N4471L

【作者名】

ASH

【あらすじ】

ノアでありながらエクソシストの少女。
家族と仲間。離別と再会。破壊と生成。善と悪。未と完。無と有。
ノアとエクソシストの物語

D・gray・manのファンフィクション。オリ主の破壊と絆の物語

主人公リルアが成長と共に望む物は・・・。

第1夜 リルア・キャメロット（前書き）

DグレのFFです。

オリ主（女）が暴れまわります。

原作10年前から始まります。

主人公5歳で原作時は15歳です。

第1夜 リルア・キャメロット

仮想19世紀末 - - - - -

「キャハハハッ。いたずら大成功!!」

「あははははっ 次誰にするう!?!」

黒鳶色の髪の5歳程の少女と紫紺色の髪 of 少女が階段に座ってく
すくすと笑いながら小声で話していた。

「うーん、さっきはティツキーだったから・・・」

「千年公にしよう」

二人の少女はにっこり笑うと千年公がいつも居る部屋に走って行
った。

「もう、あなたは元気が良すぎますね？」

いたずらは見事成功した。

しかし、それを見届け少女達が逃げ出そうとする時、扉から最悪のタイミングでティッキーが入ってきた。それによりティッキーに捕まり、千年公によるお説教となってしまったのだ。

「いつも言っているでしょう？」

ぺらぺらぺらぺら……」

「おい、お前等今度は何したんだ？いつもよりお説教が長く感じるんだが」

「「ティッキーと同じこと」」

「……おいおい、千年公にあんな幼稚な事したのかよ」

「だって他に思い付かなかったんだもん」

「でもね。ティッキーの時よりもいい音鳴ったんだよあ」

三人は白熱して段々声が大きくなっていった。

「こら、三人とも聞いてますか？」

千年公が青筋立てて聞いてきた

「「「ごめんなさい」「」」

「三人には罰を与えます？」

「ちょっと、何で俺まで・・・」

「口答えは許しません？」

ティッキーはうなだれた。

小声で「何で俺が・・・」とかぶつぶつ言っていた。

「それでは三人にはイノセンスの回収に行ってもらいます？」

「本当にい？」

「リルアも行つていいの？」

「ええ、いいですよ？」

「つてことは俺はお守りなわけね」

「場所はロンドンです。

ジャック・ザ・リッパーとして有名になってるようですから行けば分かるでしょう？」

「たのめますね？」

「わかった」

「僕もいいよお」

「了解です・・・」

「それでは、いつてらしゃい？」

「「いつてきまゝ」」

「それじゃ、行つてきます」

「あ。ちよつとティキポンは待つてください？」

「じゃあ僕達は準備してくるねえ」

少女達はそう言つて出て行つた

「それで、どうしたんですか？」

「それがですね、なぜだか嫌な予感がするのですよ。
リルアちゃんとロードをよろしくおねがいしますね？」

「言われなくても解つてますよ。

あの子達は俺にとつても大切な子達ですからね」

中央庁軍事機関 黒の教団本部 司令室

「今回の任務はロンドンです。

ジャック・ザ・リップーと呼ばれる切り裂き魔がイノセンスである可能性がります。

行ってくれますか。ティエドール元帥」

「わかったよ。ロンドンだね。行ってくるよ」

「よろしくお願いします」

ロンドン

今は夜。それだけでも不気味なのに辺りを覆う霧がよりいっそうに怪しさを引き立てている。

そんな夜に出歩く娼婦が一人。

（なに？今日はいつもより霧が濃いわね。
最近、物騒なのにやんなっちゃうわね）

娼婦はいつものように客を求めて路地裏に向かった。

娼婦はいつも自分が立っている場所に黒い影があるのを見た。

「あら、お客さん？・・・きゃー！！！」

娼婦が居た場所には血だまりと肉塊だけが残った。

リルアサイド

『ノア様〜。見つめました〜。見つめましたよノア様』

レベル2のAKUMAがティツキーに報告に来た。

「おっ！そうか。行くぞリル、ロード」

「「わかった〜」」

『こっちダス』

ボク達はAKUMAに先導されて十字路にある家の上に立った。

「あそこダス。・・・あれっ？3人増えてます」

AKUMAの指差した方を見ると、霧の中に黒い霧と一人の人間が立っているのが見えた。

「ねえ、ティキー、ロード。なにあれ？

黒い霧がイノセンスだよね」。

だったら、あの人間は？殺されるの？」

「リル、黒い霧はお前の言ったとおりイノセンスだ。

だが、あの人間はただの人間じゃない。

あれはエクソシストとファインダーだ。俺達と敵対する者だ」

「あれが？千年公が言ってた？」

「そうだよお

あいつ等は、弱いくせに僕等の邪魔をして来るんだよお

せっかく作ったAKUMAもレベル1のうちに壊されちゃうんだ
よお

まあ、それ以上に増えてるから問題ないんだけどねえ」

「じゃあ悪い人？」

「うん。どうなんだろう

悪いのは神であって、選ばれてしまったあの人たちは謂わば、被害者なんじゃないかなあ

と思う？ティッキーは」

「俺は俺等を攻撃してこない限りは悪いかどうかはわかんねえな立場によって見解は変わるからなあ」

「・・・よく分かんない・・・」

「無理して考えなくていいよお
リルアはまだ5歳なんだから、大きくなったらでいいよお」

「うん、わかった・・・」

「お？あれって元帥なんじゃねえーか」

「んゝ見せてえ」

「ボクも見たい。みせてゝ」

ボクはおんぶしてくれていたティツキーの肩に顎を乗せて下を見た。

さつきいた人、枇杷茶色の髪の男の人はさつきまで持っていなかった鑿^{のみ}状の物を持って立っていた。

「なにあれ？」

「うんつとねえ。あれはイノセンスって言うてえ
僕等やAKUMAに攻撃できる有一の物なんだよお」

ロードが話している間に枇杷茶色の男の人と一ジャック・ザ・リッパ―《イノセンス》との戦闘が始まった。

初めはエクソシストの人が押していた。だけど、一瞬の隙を突いてジャック・ザ・リッパーがファインダーの人に攻撃を仕掛けた、ファインダーは瞬く間に細切れにされて人の形を成していなかった。この戦いはエクソシストが勝った。エクソシストが放ったジャック・ザ・リッパーそっくりの黒い霧がジャック・ザ・リッパーを倒したのだ。

「ありやりや、介入する暇もなかった」

「今から奪えばいいじゃん」

ティッキーとロードがそう話しているとき、エクソシストがボク達の方を振り向いた。それから、手に持ったイノセンスを見ると、おもむろにこちらに投げつけてきた。

「うわあああ!?!」

「!リル!?!」

「どうしたの!?!」

投げられたイノセンスは一直線にボクに向かってきた。

どんどんイノセンスが迫ってた

そのままボクの視界は暗転した――

テキサイド

ジャック・ザ・リッパーとエクソシストの戦闘はエクソシストの圧倒的勝利となって終わった。

「ありやりや、介入する暇もなかった」

「今から奪えばいいじゃん」

俺達が呑気に話していると、一人だけまだ下を見ていたリルアが急に騒ぎ出した。

「うわあああ!?!」

「!リル!?!」

「どうしたの!？」

リルアの方を見ようと後ろを振り向く時、何かが目の前を通り過ぎた。

次の瞬間、リルアの方から衝撃がきた。

俺の背中にぶら下がっていたリルアはそのまま手を離して屋根の上に落ちた。

「うあああああ!！」

「リルア!?!どうした!?!」

リルアは右目を抑えてのた打ち回っていた。

「どうしよう!?!早く千年公に・・・!」

「そうだな、ロード、扉を・・・!」

ロードがすぐに扉を出現させた。

俺はこんな時に何も出来ない無力感と焦りに頭が真っ白になった。

俺達は扉を通って千年公の元に着いた。

「どうしたんですか皆さん？」

「千年公。リルが・・・！」

「はい???・・・これは!!！」

「どうなの？」

リルアの眼を見たとき千年公の顔が変わった。
今まで見たことのないような顔で尋常じゃないくらいに汗をかいていた。

「・・・リルアちゃんに、イノセンスが入り込みました・・・」

「!?!イノセンス!?!どうして・・・」

「おそらく・・・適合者・・・なのでしょう・・・」

「!?!リルアはノアだよ!！」

「イレギュラー・・・だからでしょう」

「どういことなんだ?千年公・・・」

「・・・リルアは第0使徒 無を司るもの。
あなた方も知つてのとおりノアも初めは普通の人間として生まれて
きます。」

しかし、この子は生まれながらにしてノアだったのですよ。生れ落
ちたその時にはノアとして覚醒していたのです。」

「・・・そういえば、リルは赤ん坊の頃からここに居たような・・・
」

「ええ。覚醒が分かったので私が迎えに行つたのです。赤ん坊が覚
醒していたのでびっくりしましたよ?」

「つまり、どういふことお」

「つまり、14番目の時と同じように何が起こるか分からないと言
うことです」

「そう」

「で?この子はどうなるんだ?」

話がずれ始めたので軌道修正した。

リルアが苦しがつてるのに呑気の話なんかしてられない。

「おそらく、今はノアの遺伝子とイノセンスが反発し合っているの
でしょう。今はとにかく安静にしているしか手はありません。」

自分の無力さがこんなに悔しいと思つたのは今日が初めてかもし
れない・・・。

2年後
- - -

リルアサイド

今日はボクの学校の入学式だ。

ボクは5歳のときに右目にイノセンスが寄生した。
ノアの遺伝子とイノセンスが反発しあい1年程生死の境をさまよった。

一年程で反発が大人しくなって最近では反発はなくなった。

その間、皆には心配をかけたことを申し訳なく思っていたけど、歩けるようになるみんなで散歩に行ったりして、これでよかったのかなとか罰当たりなことを思ったりした。

だいぶ回復してきた頃にダークマター製の右眼と額半分が隠れる程度の仮面をもらった。（ジャスデビが基礎を作りティッキーが整形、千年公が着色、ロードがデザイン、後で飾りと言ってシェリルお父様が丸い赤い宝石を2つ着けてくれた）

イノセンスの誤作動防止と言うことでもらったけど皆が作ってくれたので大切にしている。

学校はロードとは違う学校に通うことになった。

ロードが一緒だと授業参観がかぶるとかいろいろシエリルお父様と千年公たちが拒否したからなんだけど、まあよかったかなって思っている。

制服は改造オツケーなので改造した。

ブレザーの左手の袖を長くして手が完璧に隠れるようにして中にフードつきの服、プリーツスカートのしたには右足のは忍者風スパッツ、左足にはニーハイ（これはロードとおそろいの縞々のやつ）靴はブーツで紐をぐるぐる巻きにする少し変わったやつ。最後にお気に入りの扇子を左腕に付けて完成。

入学して1週間、皆がボクの眼の仮面を見てくるので、ニットボウをかぶって仮面を隠すことにした。

リルア 12歳

今日はティツキーと一緒にAKUMAの様子を見に行ってきた。

レベル2のAKUMAにファインダーが殺された。

レベル2は結局、女の子のエクソシストに壊された。

女の子のエクソシストがファインダーのために泣いたのがなぜか
気になった。

あの日からいろいろ考えるようになった。

人間がどうしてもあそこで涙するのか・・・。

凄く気になった。

ロードにこのことを話してみた。

ロードは「じゃあさ、行ってみればエクソシストの巢に。リルアにはその資格があるからだいじょうぶだよ」と言った

分かるまで悩むのがボクだったから、分からないのは凄く嫌だった。だからボクはエクソシストの巢に行くことにした。

思い立ったら即実行と思って黒の教団に行こうとしたらロードに引き止められた。

「なに？」

「そのままエクソシストの巢に行っても無駄だと思うよお」

「じゃあどうするの？」

「リルにイノセンス投げてきた奴いたでしょお」

そいつの所に行った方がいい」

「わかった。行ってきます」

「いつてらっしゃいリル。気をつけてねえ」

「みんなによろしくね」

それから半年ほど世界を回っていたら、ボクにイノセンスを投げた奴に会えた

その人の名はフロア・ティエドル。
元帥という地位にいてイノセンスや適合者に会うために世界を回っているそうだ。

それでボクは適合者としてティエドル元帥と旅をした。

ティエドル元帥は絵を描くためにいろいろな地で足を止めたが、どの地も暖かく気持ちのいいところだった。

ノアー族を出て3年、ティエドール元帥に会って2年半の月日があった。

僕の力が安定し始めた頃に師匠が教団に行ってみないかと言った。

元の目的はこれだったんだが、なんだかんだで師匠の元が結構楽しかったので少し寂しかった。

師匠から貰った絵を持ってボクはエクソシストの巣《黒の教団》へ向かった。

第1夜 リルア・キャメロット（後書き）

リルアとロードが仕掛けた幼稚ないたずらはブーブークッションです。

次からは教団に行きます。

第2話 黒の教団（前書き）

アレンが教団に着く1〜2週間前の出来事です

第2話 黒の教団

「よいしょっ！」

リルアは今、崖を上っている

何でかって？それは、崖の上にボクの目指してる黒の教団があるらしいからだよっ

たのしみだねっ

「よいしょっ」

でもさっ。さすがにこれは無いんじゃないかな。

何だよこの高すぎる崖！頂上が雲に隠れて見えないよっ

「もうちょっとっ！」

リルアはやっと急激斜面から抜け出すことが出来た

リルアが上りきった感慨を込めてエクソシストの巣、黒の教団を見上げた

そして、固まった。

「これが、エクソシストの巣？」

黒の教団はその名のとおり真つ黒だった。

こっちの方が悪の組織っぽい。大丈夫かこの国！？

「まいつか。ひとまず入れてもらおう」

リルアは門らしき場所に向かって歩き出した。

黒の教団 司令室

「なんだいこの子は!？」

ベレー帽にメガネを掛けた男がホログラムに映ったリルアを見て
声をだした

「ダメだよ、部外者いれちゃあ~~~~
何で落とさなかったの!？」

「あ、コムイ室長
それが微妙に部外者っぽくないんすよね」

ベレー帽の男コムイは幸薄そうな青年に向けて怪訝そうな顔をした

「ここ見て兄さん」

ツインポニテの少女がコムイにある一点に注目するように指で示す

「この子、ゴーレム連れてるの
一般人がゴーレムなんて持ってないでしょ?」

『すみませ〜ん。こんにちは？』

ここエクソシストの総本部で聞いてきたんですけど、合ってます？
おじ様が一応、紹介文書いてくれたんですけど、幹部の方と謁見
できますか〜？』

「おじ様って誰だ！？」

「紹介って言ってますけど室長どうします？」

「う〜ん、どうしようか？」

「兄さん？何悩んでるの」

「いや、おじ様ってだれなのかな〜とね
一応あのこが敵じゃないのは分かってるけど念には念を入れない
とね」

ツインポニテ少女他全員がその言葉に頭をひねる中、コムイは言
った

黒の教団 門前

しばらく待っていると男の声が周りを飛んでいるコウモリのようなゴーレムから聞こえてきた

『後ろの門番の身体検査受けて』

「へっ？」

後ろを振り向くと大きな顔が門柱に張り付いていた

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・どうも？」

一応挨拶はしておいた。人間関係の基本だからね

すると、門柱に張り付いていた顔がすごい勢いで近寄ってきた

《レントゲン検査！　アクマか人間か識別！！》

人面門柱はリルアにもものすごい光量のビームを浴びせてきた

リルアはその形相があまりにも怖くて動けなかった。

《んん！？バグか？映らない・・・・・・・・！？》

門番は不審に思っただけで足元から順に見ていった

《！？何だ、あれは・・・・・・・・！？》

こいつアウトオオオオオっ！！！！》

門番の声が教団内に響いた

「え！？」

《こいつうつんねえ！仮面がアクマだ！アウトだアウト！！》

門番は汚らしく鼻水と涙を飛ばした

《こいつの仮面は真っ黒だ！！ペンタクルで埋め尽くされて真っ黒だ！！》

それに、こいつ自体も映んねえ！

アクマ（カモ）だー！！》

「はうあっ！？」

黒の教団 司令室

「なにぃー！？」

《スパイ侵入。スパイ侵入！》

「おい、城内のエクソシストは……………」

「だいじょうぶじゃ」

「神田がついたわ」

黒の教団 門前

門の上に人が立った

その人は黒髪長髪でとても綺麗な人だった。

でも、リルアを見る目は酷く恐ろしかった。

「一匹で来るとはいい度胸じゃねえか……」

長髪美形さんは殺気を纏わせていた

「へ？え？ちよつと待って！？
なにか勘違いを……」

・ ・ ぞわっ

「！！！」

リルアは悪寒を感じ、とっさに右目の仮面を取った

リルアは刀を構え落ちてくる神田の姿を捉えた

「掌握――強制制御――」

神田はそのまま地面に着地した。

「!・・・どういうことだ?」

神田は自分の体が動かないことに困惑しながらリルアに聞いた

「ボクのほうがどうということなんだけど、

それは、ボクのイノセンスの能力。相手を思うままに操ることが出来るんだ」

「イノセンス?」

「うん、そう。」

リルアが微笑みながら答えると神田は眼光鋭くなった

「門番!――!――!」

神田は怒鳴った

《いあつてもよ。中身がわかんねえんじやしょうがねえじゃん! アクマだったらどーすんの!?》

門番が怖い顔を歪ませながら弁解した

「ボクは人間だよ！ちょっと特殊なだけだもん！！」

リルアは門番に食って掛かった

《ギャアアア近よんなぁー》

リルアと門番が騒いでいる中、神田は一人静かだった

「ふん・・・まあいい

中身を見れば分かることだ」

神田はそう言うつと対アクマ武器を発動させた

「この 六幻 で切り裂いてやる」

神田は急加速してリルアに迫った

「まって、これ見て！おじ様からの紹介状っ！！」

神田は喉に突き刺さる寸前に刀を止めた

「おじ様？誰だそれは」

「フロワ・ティエドルおじ様・・・」

「なに？」

「えっと、おじ様はあっちには手紙を出しておくよって。コムイっ

て人に宛てに・・・」

黒の教団 指令室

リルアの言葉に司令室にいる人間はコムイをじっとした眼で見ている

「その君！」

唐突にコムイは一人の中年を指差した

「は、はい？」

「ボクの机調べて！」

コムイはごみダメのように書類が乱雑に置いてある机を示した

「アレをスツか・・・」

「コムイ兄さん」

ツインポニテ少女が呆れていた

「コムイ室長・・・」

幸薄そつな青年も呆れた視線を送っていた

視線に耐え切れなくなったのかコムイは紹介状探しを始めた

・・・しばらくして

「あつた！ありましたあ！！

ティエドール元帥からの手紙です！」

手紙はぼろぼろのよれよれだった

「読んで！」

コムイは手に持っていた書類をばら撒いていった

『コムイくんへ

リルアという子が近々そちらにいくと思うので中に入れてあげてね

ちなみにあの子に何かあった場合許さないのでもよろしく

BYティエドール

「はい！そういうことです。

リーバー班長、神田君止めて」

「たまには机整理してくださいよ！」

幸薄そうな青年リーバー班長は悲痛な声を上げた

「神田攻撃をやめるんだ」

「リナリー準備手伝って。久々の入団者だ」

黒の教団 門前

《かつ開門~~~~？》

門番声と共に門が開いた

黒の教団 司令室

「ティエドール元帥とこの子が
今回はどんな子なんだろうね」

コムイは期待に満ちたまなざしでホログラムに映るリルアを見て
いた

第3夜 入城

『入城を許可します。』

リルア・キャメロットさん』

大きな音と共に扉が開いた。

だけど、喉にあてられたまま刀ほ引かれない

『待つて待つて神田くん』

「コムイか・・・どういうことだ」

『ごめんねー早とちり！』

その子ティエドル元帥の弟子だったみたい
ほら、謝ってリーバー班長』

『オレのせいみたいな言い方しないでください！！』

『そのゴーレム。見たこと無いけどこんなの持つてるの一般人じ

やないよ

その子は僕等の仲間だ』

神田ほまだ納得していないのか難しい顔をしている

- - バコッ

神田の頭にいつの間にか来ていたツインポニテの少女の拳骨が振り下ろされた

「もー」

やめなさいって言ってるでしょ！
早く入らないと閉門しちゃうわよ」

神田が渋っている

「は・い・ん・な・さ・い！」

渋々神田が歩き出した

《閉門ーーーー！》

門を入ると教団の入り口に入った

「私は室長助手のリナリー
室長の所まで案内するわね」

「よろしく」

僕達が挨拶してると神田が立ち去ろうとする

「あ、カンダさん・・・」

ボクが呼びかけるとギラツとした眼を向けてきた

「・・・ええ」と、テイルおじ・・・ティエドール元帥の弟子、リル
ア・キヤメロットです。

よろしく願います」

戦々恐々しながらそう言う

「・・・神田ユウだ。あの人のよしみで口くらい聞いてやる・・・

」

神田はそれだけ言うたスタスタと歩いていった

「リルアちゃんすごいね」。

神田が初めから好意的・・・、って訳じゃないよね。さっきは切
ってかかったし、不可抗力だけど・・・

ま、まあ任務直後だったし・・・」

「新入りか・・・」

「おっ美少女じゃないか？」

「なんだ、まだガキじゃないか」

僕達が回廊を歩いているとそんな声が聞こえてきた

「あの髪色、珍しいな。灰銀か？」

そうボクの髪の色は少し珍しい。元から珍しい黒鴉色だったんだけどイノセンスが入った時に色が変わってしまった。理由は良くわかんないみたい

「アクマがどうかという話だが・・・」

「大丈夫かよあんなガキで・・・」

「まあイノセンスに年齢、性別はかんけいないからな」

ボクはリナリーに教団内をいろいろ案内してもらいながら移動した

「エクソシストは皆ここから任務に向かうの
だから、ここのことを「ホーム」って呼ぶ人もいるわ」

ホーム・・・家族の場所、ボクにとって家はあそこだけ。家族も
あそここの皆だけ・・・。

「はい、どもお

科学班室長のコムイ・リーです！

歓迎するよりルア

いやーさつきは大変だったね」

「「「「だれのせいだ」「」「」」

至る所から怒声が拳がった

歩いているとふと気になる部屋を見つけた。

「あの、コムイさん。あの部屋なんですか？」

「ああ、あれね。あれは・・・」

「わあー！兄さん！言わないで、トラウマになるから！」

結局ボクがこの部屋の用途を知るのには遠い未来ではなかった

「ところでリルア。君のイノセンスはどんなのなんだい？
見せてくれるかな？」

大きなエレベーターに乗って降下しているときにコムイが聞いてきた。

「別にいいよ。ボクのイノセンスは眼にあるんだよ」

いつも付けているダークマター製の仮面をはずす

瞬間。ボクの視界は大きく、より鮮明にかわった。

「瞳孔が十字になっているね、眼は見えているのかな？」

「ボクのイノセンスは何でも視ることが出来る、普通の人間では見ることも出来ない風や空気とか光とか闇とか後は未来や過去。生き物の感情、思いなどもね」

「へえそれは凄い。でも、それじゃあ前線タイプじゃないんだね？」

「そうでもないよ？前線でもやっていける自信はある、けどね偵察や密偵が向いているのも確かだよ」

「わかった、うちには偵察見たいな事出来るのは、マリくらいしかなくてね。みんな派手で・・・。」

「マリさん？ティールおじ様が言っていたボクの兄弟子さんだよね。」

」

「ティールおじ様？ティエドール元帥のことかい？」

「うん、そうだよ。」

「ティエドール元帥はいい人だよ、弟子は少々個性的だけどね。そうか、ティエドール元帥の所にもついに寄生型が現れたんだね」

「寄生型？」

「寄生型。それはね、装備型と違ってイノセンスの力をもっとも発揮できる選ばれた存在なんだ」

その時、頭上から無機質でノイズ交じりの声が聞こえてきた

『それは、神のイノセンス全知全能の力なり

また一つ・・・我等は神を手に入れた・・・』

上を見上げると五つの影があつた。

「ぼく等のボス、大元帥の方々だよ

さあ、君の価値をあの方々にお見せするんだ」

「はへ、どういう・・・！？」

気配を感じて後ろを振り向くと鳶のようなものがボクの背後にあった。

「うひわぁー!!」

ボクは鳶のようなものに捕まれエレベーターから引きずり出され
たしまった

鳶のようなものは手のような感じで本体は龍のような体に顔は人
のようだった

《イ・・・イの・・・イノセンス・・・》

鳶のような手はボクの右目に迫ってきた

右目にあるイノセンスはさっきコムイに見せるために外したまま
だった

鳶のような手はボクの右目に触れると中に入ってきた

「なあ!?!うへえ・・・やめろ、気持ち悪い・・・」

どんどん奥に入ってくる感覚にボクは力が抜け頭痛と嘔吐感に吞
まれた

それでも必死に抵抗しているとコムイが笑いかけながら言った

「無意味に暴れない。」

君の十字架はとてもすばらしいよリルア

どうだいヘブラスカ?

だ』

「びつくりした・・・」

《おどろかすつもりはなかった・・・》

私はただ、君のイノセンスに触れ、しろうつただけだ・・・》

「・・・イノセンスを知る？」

《リルア・カメラロット・・・》

君の力は、未来への鍵となるだろう・・・

さまざまな思惑の中で、鍵は未来へと繋ぐ・・・

私のはそう感じられた・・・

それが私の能力・・・》

「鍵・・・？」

「凄いじゃないか~~~~~」

へプラスカの予言はよくあたるんだ
リルアにはきたいできそうだね~~~」

コムイが手を叩きながら近寄ってきた

「コムイさん・・・」

「バキヨッ

「ぐへえ！」

「いきなりでびつくりしたよ。」

「ごめんね、突発的に手が出ちゃったよ」

ボクはコムイの顔面に拳をめり込ませた

「謝るなら、殴らないで・・・」

「小さいながらの報復だよ」

「し、しかたないんだ・・・」

入団するエクソシストはヘブラスカにイノセンスを見てもらう規則なんだ」

「じゃあ、初めに言つてよ！」

「まあ、これで君のはれてエクソシストだ

ようこそ、黒の教団へ」

そして、ボクとコムイさんは握手を交わした

「現在エクソシストは19人となった

ほとんどは世界各国に任務で点在しているがその内会えるだろう

ちなみにヘブラスカもエクソシストだよ」

《お前達とは少し違うが・・・
私はキューブの適合者・・・
イノセンスの番人だ

・・・リルア・・・君に神の加護があらんことを・・・》

リルア自室

「ふにゅ～～」

ボクはベットに寝転がった

今日はいろんなことがあったなあ

神田ユウさん、リナリー、コムイさん、ヘブさん・・・

分かるかな？ボクは知りたいんだ知らないことを・・・わからないことを・・・

「みんなまってね？」

答えを見つけたら、必ず帰るから・・・

だから、ずっとボクの家族でいてね？」

ボクはまだ知らない・・・

ボクが何者で、何の為に生まれてきたのを・・・

この出会い、これからの出会いの意味を・・・

導き出したものは、正解か、不正解か・・・

ボクが探すのは何なのか・・・

それすらボクには分からない・・・。

第3夜 入城（後書き）

次に任務に出ます（多分・・・）

それから、あれん登場です

第四夜 初任務

『リルア、リルア。我がいとし子。

共に在れんことを許しておくれ……。』

おまえを助けてやるが出来んことを許しておくれ……

不甲斐無い我を許してをくれ……。リルアよ……。」

「ううゝん」

今のは……。？

夢、かな……。？

リルアは今、与えられた部屋で目を覚ました。

さっき聞こえた声は、懐かしかった。ずっと聞いていた声だった。

あの声は誰の声……。？

分からない、分からない。

でも、きっと大切な人の声だね・・・？

「今日も一日が始まるよ、おはようみんな・・・」

今日もリルアは一人つぶやく、家族への挨拶を

すると、一匹のゴーレムがリルアに近寄っていった。そして、葉っぱの様な羽でリルアの頭を強烈にビンタした。

「あはは、わかってるよ。」

おはよう、ルーフ。」

リルアが微笑みながらさういうと、ルーフと呼ばれたゴーレムは羽と尻尾？をバタバタと動かして挨拶を返したようだ。

・・・ぐううう」

リルアとルーフのお腹から同時になった。

「ふふふ・・・。

そういえば、晩御飯食べずにねたよね。

でも、不思議だね。ルーフはゴーレムなのにご飯が食べられるんだから

千年公がさういう風に作ったのかな？」

ルーフはくるくると旋回して肯定の意を示した。

「それじゃ、食堂にレッツゴー！！」

リルアの部屋は教団の上の方の階にある。

食堂まで歩いて行っていたら相当な時間がかかる。

なので、リルアは時間短縮のために手っ取り早い手に出た。

「うーん。だいぶ下だけど大丈夫だよな？」

リルアは呟きながら、階下に落ちないようにと設置されたであろう手すりに手を掛けた

「せーの！」

リルアは掛け声と共に手すりを乗り越えた

ひゅーと効果音がするであろう勢いでリルアは落ちていった

落ちていくリルアを発見した教団の者達は一様に慌てた「子供が落ちていく」と。

落ちていく、落ちていく。リルアはどんどん加速しながら落ちていく。

このぐらいかな？リルアはそろそろかとあたりをつけルーフに？まった

ルーフに？まることによってリルアは減速していき最後にはリルアはルーフに？まって飛んでいる状態になった。

「ルーフ、この階で下ろして」

ルーフはリルアの願いど通りに食堂のある階に下ろした。

「ありがとルーフ。」

それじゃあご飯だ〜!」

「こら、まて!」

リルアとルーフが食堂に向かって足音高々に歩き出したら静止する声がかかった。

リルアが首だけを180度回転させて後ろを振り向くと、般若の顔をした神田が息も荒くこちらに走ってきた。

「うはあ! な、なに神田さん・・・?」

「リルア・・・てめえ今何してやがった?」

「食堂に入ろうと・・・」

「ちがうだろ! お前は食堂に向かうために何処を通ってきたのか聞いてんだよ」

「えっと、近道であそこを・・・」

リルアは普段はエレベーターが浮遊している中央部をさした

「ああ、そつだな。」

それで、お前があそこを飛び降りたと俺に知れせがきた」

「えっと、どうして神田さんに知れせがいったの？」

「俺が知るか！」

つまりだな、あそこは緊急時以外使うな。緊急時なら誰も咎めない」

神田は注意というかお説教というかよくわからないことを言った。

「うん、わかった。今度から気をつけるう」

あ、神田さん良かったら一緒にご飯食べよう？

一人と一匹で食べるのは寂しいからね」

「ふん、仕方がないな」

「やった」

あ、このメニューってどんなのがあるの
和食ってあるのかな」

最近和食食べてないんだよね」

「和食か？」

ジェリーの和食はうまいぞ」

「ほんと、じゃあいっぱい頼もうかな」

「ああ、たくさん食べるのは悪いことじゃねえ」

神田に付いて受付に行った

受け付けは変わった形をしていた。

ぼーと見ていたら中から暑苦しくない程度に筋肉の付いたナイスガイが出てきた。

「あんな、神田くんじゃないの今日のご注文はなーに？」

あらん？後ろの子は誰？

あんなまあ、かわいいー！長髪三つ編みがまたとってもキュート！あ、長髪がおそろいね！？かわいいーわ！

もしかして、あなたが噂の新入りちゃんかしら？やーん、かわいい妹に欲しいわ。どうもしよかったら――」

――ぐううー

ジェリーが尚も話つづけようとしているとリルアと神田の腹がなった

「あ、ごめんなさいね。話に夢中になっちゃた。

とりあえず、自己紹介はしておきましょうね。私は料理長のジェリーよ。ジェリーねえって呼んでね。

で、あなたは？」

「僕はリルア。リルア・キャメロット 15歳 好きな料理は日本食だよ。よろしくね、ジェリーねえさん」

「うふふ。かわいいわー」。

で、ご注文は？腕によりをかけて作るわね」

「俺はざるそば。」

「僕はねえ。掛蕎麦にきつねうどん、おでんに味噌汁、白米に沢庵
その他ある漬物がたべたいな」

「女の子にしては量が多いわね。食べられる？」

「うん、あ、おかわりって出来るの？」

「ええ、出来るわ。それじゃ待っててね」

「はい。リルアちゃんに神田君。お待ちごーん」

「ありがとう、ジェリーねえ。いただきます」

「ふふふ、残さずに食べてね」

「うん、わかってるう」

「神田さん、早くたべよあ」

「座れてよかったね神田さん

では、いただきます!」

「・・・いただきます・・・」

リルアが楽しくご飯を食べているとお盆を持ったりナリーがこちらに気付いた。

「あ、リルアに神田。

一緒に食べてもいい?」

「いいよ」。

リナリーは何頼んだの?」

「私はね、中華よ。あとデザートにチョコレートケーキ」

「中華にチョコ?合わない?」

「そんな事ないよ。チョコはなんにでも合うんだから」

「ええ・・・」

「そんなことよりも、リルアと神田は仲が良いわね。」

神田がこんなに早く馴染んだのは始めてだよな」

「ふん。知るか」

「神田さんはいい人だからね」

リルアたちが和やかに会話していると、食堂の入り口にリーバー班長が走りこんできた

「お、いたいた。神田、リルア任務だ。」

飯食い終わったら、室長室に来てくれ。」

「早速任務か」

「ちっ めんどくせえ」

「ふふ、仕方ないわね。」

早く食べていきましょ。私も兄さんに用事があるから一緒に行くわ」

第5夜 団服と変態

死誘桜

死を予期する桜。 死を誘う桜

ある日、一人の老人がなくなった。老人はこの辺りでは有名な偏屈物だった。

老人がたいそう大切にしたのは一本の桜の木だった。

老人は昔、遠い国から流れてきた者で、その時の持ち物は小さな木の苗木だけだった。

老人が死んだ日、辺りは真っ白になるほどの大雪だった。そんな日にあの桜の木は花を咲かせた、それは、一輪や二輪ではなく満開だった。

それから不思議なことが起こりだした。その光景を見たこのあたりに住む住人が桜に触れたすると見る見るうちにその住民は80代のようによぼよぼになり死んだ。

それから、桜は何人もその死に立ち会った。

「・・・というのが、今回君達に行ってもらう任務なんだけど。いつてくれるかい？」

室長室によばれたリルア、神田そしてリナリーはコムイに任務について説明を受けていた。

「・・・で？場所は何処なんだ」

「うーんと、場所はねえ。何処だったけ？
あ、思い出したよ。スペインの端の方の町だよ」

「スペインだな。分かった
行くぞ、リルア」

神田はリルアに声をかけると室長室から出て行った

「うん、わかったよお

じゃ、リナリー、コムイさん、バイバイ」

リルアは神田の後を追いつて行った。

「バイバイ、だってさ。行ってきますっていつてもらえなかったね」

「うん、いつかは言ってくれるようになるよね」

「まあ当分は無理そうだけどね」

「どうして？」

「あの子、すっごく周りを警戒していたからね
それが、取れない限りここはあの子のホームにはなれない」

- - 地下水路 - -

「暗あ、ここすごく暗いね
あんまり好きじゃないな」

「ふん、すぐに慣れる」

リルアと神田が船に乗りながら話をしているとコムイとジョニーがこちらに走ってきた

「いや、良かったよ間に合って」

「どうしたのぉ」

「リルアの団服。

渡すの忘れてたから焦って持ってきたんだよ」

「団服？

ああ、神田さんが着ているのと同じやつのこと？」

「うん、まあ少しづつアレンジしてあるから厳密に言つと違うんだけどね

はい、リルアのはこれだよ」

リルアに渡された団服は袖の右が七分で左が十三分になっていて丈の右がひざ辺り左が腰辺りのコートとミニスカートとニーハイとパンプスに編み上げの紐がひざ辺りまで来る物だった。

「うわぁ、ありがとうお着替えてくるね」

リルアは着替えるためにいったん船を下りた

「…お前らの将来が、少し心配になってきた…」

神田の言葉にコムイとジョニーが固まった

「い、いや、神田。アレは少し趣味が入らなかったこともないけどリルアの要望を出来る限りいれるとあんなった結果であって・・・」

「だまれ、変態…」

神田のこの一言でジョニーとコムイは心に深い傷を負った

すると、そこへ着替えを終えたリルアが戻ってきた

「あれ？どうして二人とも沈んでるの？」

「気にするな」

こうして神田とリルアは任務へ行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4471/>

黒白の輪舞曲

2010年10月15日01時54分発行